

御門番之頭一人 御徒頭壹人 小十人頭壹人 御船手壹人 板橋五大夫 御用人壹人

竹姫君様 法心院殿 蓮淨院殿 壽光院殿 御用人 御用人 御用人 二九御留守居一人 御納戸頭之内一人 御腰

物奉行一人 御勘定吟味役一人 奥御祐筆組頭 伊奈半左衛門 右之通頂戴に罷出候、其

段向々江 可被達候布衣以下之分は、前々之通罷出事に候、

一三千石以下、五百石以上之寄合は、御祝之節不及登城候、是又可被達候、

一御留守居嫡子、大御番頭嫡子も不及罷出候間、得其意、大御番頭江可被達候、御留守居江は、此方

方相達候、尤相達候向には、御目付可被談候以上、

〔幕朝故事談〕公方家 玄猪の出御は、とび色の御小袖に、黒の御羽織なり、布衣以上、御自身被下置

〔東都歳事記〕十月上亥日 玄猪御祝儀、諸侯申中刻御登城、大手御門、并に櫻田御門にて、御箆を焚

せらる、

〔幕朝年中行事歌合〕中廿八番 左 玄猪

秋をおきて時こそあれと咲花の鏡はけふのもちいなりけり略○中

玄猪は亥の子と稱せり、十月上の亥の日を用ひらる、障あれば後の亥を用ひらる、こともあ

り、溜詰譜代の大名外様にも藤堂立花、遠山片桐の類、むかしより出仕せし家々のものは、皆熨

斗目長袴著て城にのぼる、暮かゝる頃より、白書院におほく燈を點じ、兩御所上段に著御在、五

色の餅ひ薄盆に盛て菊の花を摘そへて御前にす、む、布衣より以上の輩には、御みづからは

を賜ふ、次に大きなひら臺ふたつに餅あまた積重て、しきみのきはにおき、布衣以下の司も

ろもろの番士同朋に至る迄、七人づゝ出て、臺にある餅を取てまかづ、此夜兩御所御のし目の

したに、紫の御衣を奉るとなん、是室町家などのふるき世のすがたなるべし、

〔徳川禁令考〕三十三年始嘉節慶應三卯年三月廿三日 御祝儀事御廢止之件々